東北大学
TOHOKU UNIVERSITY

Press Release

2024 年 12 月 4 日

報道機関　各位

国立大学法人東北大学

日本の医学界は「スペイン風邪」にどのように対応したか

―医学・歴史学連携で大正時代の医学雑誌『日本之医界』を読み解く―

【発表のポイント】

- 全世界で数千万人の死者を出した「スペイン風邪」（1918～20 年）の時期に発行された医療業界誌『日本之医界』（東北大学附属図書館医学分館蔵）を分析し、当時の日本の医学界は国内感染爆発に至るまでスペイン風邪に関心を持っていなかった可能性を明らかにしました。
- 『日本之医界』は、北里研究所が提示したスペイン風邪の病原体がインフルエンザ菌である説を支持しました。当時、北里研究所と東京帝国大学・国立伝染病研究所の政治的対立があり、各自が属する学派が、どの病原体説を支持するかに影響していたと考えられます。
- 本研究は 2020 年以来、東北大学災害科学国際研究所内で開催してきた「“スペイン風邪”文理連携勉強会」メンバーが実施し、医学と歴史学の連携による「総合知」の研究成果です。

【概要】

1918 年 3 月以降スペイン風邪が世界的に流行し、日本でも都市部や軍隊の駐屯地を中心に感染が広がっていきました。この時期に発行された医療業界誌『日本之医界』を分析した結果、スペイン風邪流行に関する記事が掲載されたのは、日本国内で感染爆発が起きた 1918 年の秋以降であったことが明らかになり、日本の医学界が流行初期段階でスペイン風邪に関心を寄せていなかった可能性が示唆されました。また『日本之医界』は、スペイン風邪の病原体として、北里研究所が提示したインフルエンザ菌説を支持しました。これには、当時の日本の医学界における、北里研究所と東京帝国大学・国立伝染病研究所の政治的対立や『日本之医界』の属する学派などが影響していたと考えられます。

本研究成果は 2024 年 12 月 1 日、Journal of Disaster Research に掲載されました。

【詳細な説明】

本研究は 2020 年、東北大学災害科学国際研究所に所属していた 5 人の研究者（注 1）によって組織された「“スペイン風邪”文理連携勉強会」による成果です。勉強会では新型コロナウイルス感染症のようなパンデミックに対して先人たちがどのように対応してきたのか、感染症の歴史を医学・人文社会科学の双方から検討することで、「総合知」による感染症研究を目指してきました。その一環として、1918 年から 1920 年にかけて全世界で数千万人の死亡者を出した「スペイン風邪」のパンデミックに着目し、当時、医療関係者を主な読者対象に定期的に発行されていた医療業界誌『日本之医界』（東北大学附属図書館医学分館蔵）記事の分析を通じて、スペイン風邪に関する当時の日本の医学界の動向を明らかにしました。

分析対象は、1918 年 1 月から 1919 年 3 月にかけて発行された『日本之医界』第 228 号から第 279 号に掲載された 3,856 本の記事です。『日本之医界』は、1918 年 1～12 月は月 3 回、1919 年 1 月からは毎週発行されていました。この時期は、日本におけるスペイン風邪流行発生以前、および 1918 年秋から 19 年春にかけての流行第一波の時期にあたります。歴史学研究者は、『日本之医界』記事を当時の社会状況に照らし合わせて読み解く作業を担い、医学研究者は、記事の医学的な妥当性を、当時および現代の医学レベルに照らして評価する作業を担いました。分析の結果、以下の 2 点が明らかになりました。

1. 1918 年 3 月以降スペイン風邪が世界的に流行し、日本でも都市部や軍隊の駐屯地を中心に感染が広がっていたにもかかわらず、スペイン風邪流行に関する記事が『日本之医界』に掲載されたのは、日本国内で感染爆発が起きた 1918 年秋以降でした（図 1）。当時、『日本之医界』が医療関係者に一定の影響力を持ち、医療関係者に向けた記事を掲載していたとすれば、日本の医学界は、国内で感染爆発が起きるまでスペイン風邪に関心をよせていなかった可能性があります。

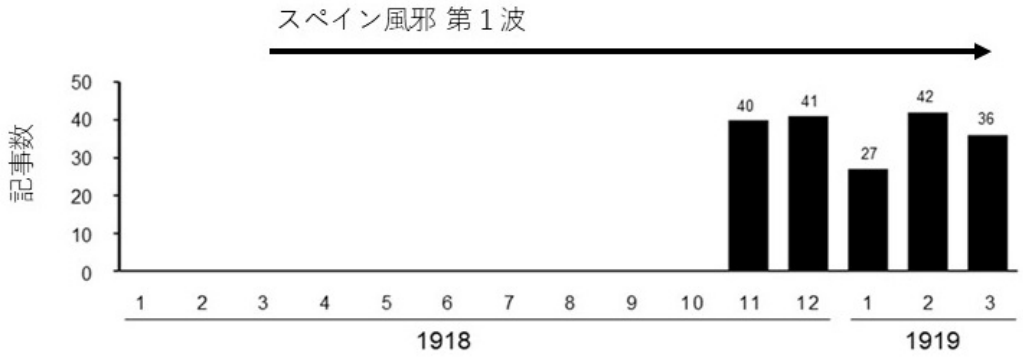

図 1. スペイン風邪第 1 波の流行と『日本之医界』に掲載された関連記事数

2. 『日本之医界』の論調は、医学界の学派に影響されていました。ウイルスがまだ確認・可視化されていなかった大正当時、国内外の医学界では病原体の可能性として（1）インフルエンザ菌、（2）肺炎双球菌、（3）不可視的超顕微鏡的微生物の3説が議論されていました。『日本之医界』は、1918年11月号（第259 号）よりスペイン風邪の病原体に関する記事を掲載するようになりましたが、これら 3 説を科学的かつ詳細に紹介しつつも、基本的にはインフルエンザ菌説を強固に支持し、他説については批判的に取り上げ「根拠が薄い」等と結論していました。

この背景には、『日本之医界』創設者兼編集長の土屋清三郎（1882〜1946）と、当時の日本の細菌学界の重鎮である北里柴三郎（1853〜1931）との個人的関係があります。『日本之医界』の報道内容は発刊当初から北里の主張と親和性が高いものでしたが、特に1892年の「伝研騒動」(注2) 以後、その傾向は顕著となりました。インフルエンザ菌は、北里柴三郎が 1892 年に（Richard Pfeiffer とほぼ同時に）発見したもので、スペイン風邪流行時、北里研究所はその病原としてインフルエンザ菌説を取りました。『日本之医界』も、北里研究所を支持した結果、インフルエンザ菌説に肩入れした報道姿勢を示したと考えられます。『日本之医界』記事からは、学派や製薬業界内の対立などの複雑な要因が、日本の医学界、特にスペイン風邪流行時の科学的動向に影響を与えていたことがうかがえます。

スペイン風邪流行時、対策としてマスク着用や感染者との距離を保つことが奨励されるなど、100 年前の日本でも基本的に現代と同じ合理的な方法が取られていました。一方で本研究は、病原体が特定できない状況下において、科学以外の要素が病原に関する議論に影響を与えることも明らかにしました。新型コロナウイルス感染症パンデミック時にも、同様の状況が発生していたかもしれません。大正時代の医学界がスペイン風邪にどのように対応したかを医学・歴史学連携で読み解いた本研究は、現代のパンデミックへの対応に関しても示唆を与えるものです。

【謝辞】
この研究は東北大学災害科学国際研究所レジリエンス共創センターの助成により一部支援されました。

【用語説明】
注 1. 「“スペイン風邪”文理連携勉強会」メンバー：三木康宏 准教授（基礎医学、現・医学系研究科）、川内淳史 准教授（歴史学、近現代医療史）、中鉢奈津子 特任准教授（科学コミュニケーション・異分野連携）、児玉栄一 教授（ウイルス学）、伊藤潔 東北大学名誉教授（災害産婦人科学、現・宮城県対がん協会

細胞診センター所長）

注 2. 伝研騒動：1892 年にドイツ留学から帰国した北里柴三郎は、福澤諭吉からの支援を受けて東京・芝公園に日本で最初の伝染病研究所である「私立伝染病研究所」を設立しました。北里は 1899 年に同研究所を国に寄付、内務省管轄の「国立伝染病研究所」（伝研）となり、北里は初代所長となります。ところが 1914 年、当時の大隈内閣は、所長の北里に諮ることなく伝研を内務省から東京帝国大学へ移管することを閣議決定しました。それに抗議した北里および研究所職員全員が伝研を辞職し、1915 年、新たに北里を所長とする「北里研究所」を設立します。以後、日本の細菌学界は、北里研究所と伝研・東京帝大の二大学閥が対立する状況となりました。

【論文情報】

タイトル：Analyzing trends in the medical community during the Spanish flu pandemic in Japan with the comprehensive knowledge of humanities and sciences: A case study of the medical journal, *The Japan Medical World*

著者：
Atsushi Kawauchi*, Natsuko Chubachi, Yasuhiro Miki, Kiyoshi Ito, and Eiichi N. Kodama
*責任著者：東北大学災害科学国際研究所　准教授　川内淳史

掲載誌：Journal of Disaster Research vol.19 no.6, pp. 921-934
DOI：https://doi.org/10.20965/jdr.2024.p0921
URL: https://www.fujipress.jp/jdr/

【問い合わせ先】
（研究に関すること）
東北大学災害科学国際研究所
准教授　川内淳史
Email: atsushi.kawauchi.a8@tohoku.ac.jp

（報道に関すること）
東北大学災害科学国際研究所　広報室
TEL: 022-752-2049
Email: irides-pr@grp.tohoku.ac.jp